

「いじめ」や「虐待」をいかに防ぐか

質的研究からのアプローチ

- 企画：** 日本発達心理学会ナラティブと質的研究分科会
 浦田 悠 (京都大学大学院教育学研究科)
 高橋菜穂子 (京都大学大学院教育学研究科)
 やまだようこ (立命館大学衣笠総合研究機構)
- 司会：** 浦田 悠 (京都大学大学院教育学研究科)
- 話題提供：** 戸田有一 (大阪教育大学教育学部)
 遠藤野ゆり# (法政大学キャリアデザイン学部)
 高橋菜穂子 (京都大学大学院教育学研究科)
- 指定討論：** 森岡正芳 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)
 やまだようこ (立命館大学衣笠総合研究機構)

[企画主旨]

学校でのいじめ、幼い子どもへの虐待…。子どもたちをとりまく発達環境において、さまざまに生起する継続的暴力が大きな社会問題となっている。このような暴力をいかに防ぐのか。あるいは、暴力の中で傷ついた子どもをいかに救うのか。これらは被害者／加害者という二項対立的な見方では到底対応できない問題である。また、問題が起こる社会的文脈は複雑に絡み合っており、その原因を単純化してとらえることも難しい。

このような問題に対し、質的研究やナラティブ・アプローチでは、単一の原因を追及する因果関係におとしこむのではなく、同じ出来事にも、当事者の立場によって複数の物語があることを許容する。また、文脈依存的でローカルな現実に着目しながら、当事者の体験によりそい、当事者と研究者が協働実践的に問題と関わろうとする。質的研究やナラティブ・アプローチから新たな解決への道を切り拓く方法論を議論したい。

発達心理学会分科会「ナラティブと質的研究会」では、学校における「いじめ」をテーマに当事者の語りを聞きながら個別具体的な事例をもとに、議論してきた。本企画では、「いじめ」を「虐待」の問題とも関連づけて、日常生活における近親者による暴力、発達の環境における継続的暴力の問題としてとらえ、議論をさらに発展させる。

[話題提供概要]

いじめの推測統計研究の限界から質的研究に期待する：戸田有一

1980年代からいじめの先駆的研究が行われ、徐々に国際的共同体制が構築され、近年はネットいじめ研究や大規模ないじめ予防プログラムの評価研究も行われている。日本では自殺がいじめのワーストケースと認識されているが、PISA 高学力が話題になるフィンランドでは、2008年の学校銃乱射自殺事件の犯人が元いじめ被害者であった。それらワーストケースの防止のために、推測統計研究のみでは迫れない課題の整理（定義分節化問題、予後問題等）を試み、今後の研究の展開方向を議論したい。

子どもの語りに着目した被虐待経験受け入れプロセスの考察：遠藤野ゆり

児童虐待問題の難しさの一つに、被害者が自分の経験をそれと認識しづらいという点がある。しかしこの認識は、虐待の再現を防ぐためには非常に重要である。そこで、事例に基づき、自立援助ホームで暮らす被虐待児童が、自分の体験や家族との関係をどのように語るのかに着目し、その変化が彼らの「社会的自立」にどのような意味をもっているかを考察する。これは、虐待の世代連鎖対策のための基礎研究にもなり、また対話による被虐待児童への支援の可能性を模索する道でもある。

児童養護施設における家族再統合の支援：高橋菜穂子

児童養護施設では、離れて暮らす家族が安定した情緒関係を維持できるよう、広義の家族再統合が目指される。虐待をしてしまう親を、懲罰や矯正の対象として排除するのではなく、ともに子どもを支える協働関係の構築を目指すことが重要である。本発表では、親と子の媒介者としての職員の実践をモデルとして提示し、困難な状況に置かれる家族を、社会資源の柔軟なむすびによって下支えしていく道筋を考えたい。